

▶  
市民活動のハジメカタ  
book

6の事例と10の言葉

だ市ま  
い民ち  
たパの  
いワ課  
解！題  
決では



ASHIYA  
MACHI  
DESIGN  
LABO.

【市民活動に関する問い合わせ】  
あしや市民活動センターリードあしや  
〒659-0065  
兵庫県芦屋市公光町5番8号  
TEL：0797-26-6452  
FAX：0797-26-6453  
Email：aia@ashiyampo.jp

【発行】  
芦屋市企画部市民参画・協働推進室  
〒659-8501  
兵庫県芦屋市精道町7番6号  
TEL：0797-38-2007  
FAX：0797-38-2004  
Email：shiminsankaku@city.ashiya.lg.jp

【編集】  
特定非営利活動法人コミュニティリンク

私たちは、便利だったり、早かったりを「良い」と思っています。しかし、お金を使って手にいれるサービスから「豊かさ」は生まれるのでしょうか。そう。生まれないのです。

もう、みんな「豊かさ」の意味を分かってくるのに、やめられません。そして、ますます「余裕」を失っているのです。

でも、ふと周りを見た時、芯を持って真っ直ぐにやるべきことに取り組んでいる人いませんか？

その人たちが「余裕」をもってクリエイティブに動けるのは、自分の志を対話できる「場」があるからかもしれません。

そして職場でも家庭でもない「場」いわゆる「サードプレイス」が人生においても、とても重要だと考えているのでしょうか。

本冊子では、芦屋にある様々な「場」にお邪魔し、運営方法や関わる人たちのアイデンティティ、解決したい課題を聞いてみました。

あなたがもし「余裕」のない毎日を送っているのなら、あえて時間をかけて「場」の運営に関わってみませんか。

きっと、時の流れるスピードがユックリとなって、いつもと違う景色が見えてくるでしょう。



### 23 事例06

芦屋から地球を考える！  
一隅の光となる歌声を届けたい。  
**私の好きなこの街復興支援プロジェクト**



### 19 事例05

まちの中での役割を見つけると、  
人生は『おもしろく』なる。  
**あしやらへん編集部**



### 15 事例04

こんな路地裏のマンションに!?  
古本屋コミュニティが生む人間関係。  
**風文庫**



### 11 事例03

芦屋というリズムにみんなでのる。  
ジャズからはじまるまちづくり。  
**芦屋ジャズフェスティバル実行委員会**



### 07 事例02

森マイスターたちによる  
「歩くだけで楽しめる」山道計画。  
**芦屋森の会2001**



### 03 事例01

山に人が集まる!? 場づくりの  
パイオニアが考えた次なる仕掛け。  
**六甲山カフェ**

## point ▼ 25

一つのアイデアが、  
ソーシャルビジネスになるまで

市民活動に役に立つ「10の言葉」は  
本冊子で紹介している6団体で  
2022.2・3月に行った「座談会」の  
対話から抜粋しました。

／ 私たちも参加しました ／



株式会社エンバブリック  
ソーシャルプロジェクト・プロデューサー  
**広石 拓司** 氏



株式会社ソトコト・ネットワーク  
未来をつくるSDGスマガジン「ソトコト」編集長  
**指出 一正** 氏

# 01

## 山に人が集まる!? 場づくりの パイオニアが考えた次なる仕掛け。

### 声

屋ロックガーデン入口、高座の滝の手前にま  
るで洞窟のような雰囲気の中六甲山カフェに  
今、多くの若者が集まっています。仕掛け人は大阪  
ガスで働きながら多くの場づくりを手がけてきた山  
納さん。山納さんは大阪の中崎町で『モンカフェ』  
という日替わりで店主が入れ替わるシェアキッチン  
を2004年頃にスタートさせた場づくりのパイオニア  
です。モンカフェは20坪ほどの空間でカフェやバー、  
音楽イベントが行われるなど、まさにモンなお店  
です。そんな山納さんと仲間たちは、次に人と人が  
コミュニケーションをとる場として『山』が最高のな  
ではないかと考え「山でカフェをしたら面白いよね。  
山の力で人は集まるんじゃないかな」と企画したの  
が『六甲山カフェ』でした。当初はイベントとして  
開催したのですが、その後洞窟スペースでのカフェ営  
業へと発展し、2010年からはモンカフェと同  
じく複数の店主で運営するようになりました。

現在は主にオーナーである糸井さんが毎月第一土・  
日曜日にカウンターに立っています。糸井さんは、  
初めてここに来た時のことを笑いながら「よく家族  
で山に登りに来てたんです。下山してからのお酒が  
大好きなんです。ここはスルーしてたし、なんな  
らちよつと汚いぐらいに思っていました。でも、ある日、  
息子が声をかけられて渋谷入ることになってしまっ  
てそのまま話が盛り上がりつつたんですよ。そこで「一緒にお  
店をしないか」と誘われ。その時は深く考えず、月  
1なら今の仕事をしながら出来るし、楽しそうやな  
と思っただけで参加を決めたそうです。

山納さんはあくまでも客という立場でお店に出入  
りして、お客さんとお客さんをつないだり、話を聞  
いて回っているんだとか。「みんな、山の話をした  
いんですよ。イノシシが出たとかクマが出たとか。山

も良い、大丈夫と思える場をね」

コミュニケーションと呼ぶには軽すぎる、ノスタル  
ジックで暖かい人と人が真に心を通わすことができ  
る空間の六甲山カフェ。こんな場で話しあえば、今  
地域が抱えている課題なんて全て解決してしまうの  
ではないでしょうか。

次の休日、あなたも六甲山カフェで山の力に包ま  
れ、人との交わりに浸ってみませんか?『建前で会  
話すること』『本音という弱さを隠すこと』が馬鹿ら  
しくなるかもしれません。

から帰ってきた人の話を聞くことは面白いですよ。  
ただ知り合いとお喋りしてるだけだと内輪話になっ  
ちゃいますからね」と話す山納さん。コミュニティーを  
育てるために、身内だけの場にならないよう注意し  
ているとのこと。「モンカフェと六甲山カフェは似  
ているようでまったく違います。モンカフェは実験  
空間であり、自分がしたいことでお客さんが入れば  
成り立ちました。けど、六甲山カフェでは山を愛する  
人たちの調和を保たないと続かないし、受け入れ  
てもらえない。自分のしたいことと山に来る人たち  
がやってもらいたいことをどう調和させるか、今はそ  
れを探っている最中なんです」

今後は、お店を開ける日も増える予定だそうです。ま  
た店主以外にも関わりしろを作ることで仲間をどん  
どん増やしていくとのこと。山の入口まで水を運ぶ、  
ゴミ捨てをする。何か手伝いたいという人たちが集  
まってきているのだとか。



これまでも演劇やアートに関わってきた山納さん。  
「ご飯やお菓子を作って提供することも表現活動なん  
じゃないか?とと思ってまして」と語り、これからは表  
現空間としてのカフェも、そこでの人と人の交流を  
取り戻したいという。しかし世間では、デジタル化  
が進むにつれ、リアルなコミュニケーションは、どん  
どんと少なくなっています。近所同士での挨拶もほ  
んど見なくなりました。社会の雰囲気は確実に変  
わってしまっています。そんな現代でも、山は  
人と人の距離感を変えてくれると山納さんはいま  
す。「六甲山カフェは、山間にある古い建物なので近  
代化していませんよ。芦屋は、そんな場を担保  
しておいた方が良いでしょう。知らない大人と話して



### START

カフェが持っていた  
表現の場所としての力を、  
山で企画。

### NOW

日替わり店主が好きなものを提供。  
関わりしろを作ることで、  
さらに多くの人が集まる。

### VISION

年代に関係なく、  
気兼ねなく、それとなく、  
話できる空間を残していく。

私たちが  
解決したい  
課題

人と人の間に  
生まれる

『建前』という溝



六甲山カフェ  
(2004年設立)  
糸井 健太 山納 洋

禁煙をきっかけに山登りに興味を持つ。高座の滝に下山した時に声をかけられ六甲  
山カフェの一員に。普段は神戸市内の遊技場で店長を務める。(糸井)  
複合文化施設やインキュベーション、シェアカフェなどに関わる。2004年、大谷  
茶屋で「六甲山カフェ」を始め、現在は茶屋の継承に取り組む。(山納)



1  
10

地域にも「意思決定」の機会を  
持ってもらおうことで、協働ができる。

全員に賛同してもらおうと  
思わなくても良い。



2  
10

# 02

## 森マイスターたちによる「歩くだけで楽しめる」山道計画。

**声** 屋森の会2001発起人である村上さんは今も代表として活動中です。発足のきっかけは芦屋市が主催した『国際文化住宅都市建設法施行50周年記念事業の記念植樹祭』にボランティアとして参加したことでした。イベントが終わりかけた頃、村上さんの頭にふと『この苗はちゃんと育つのだろうか』と疑問が浮かび、同じボランティアの人たちへ「皆さん、私はこの森を育てませんか？」と呼びかけたそうです。この呼びかけに、なんと32名もの賛同者が。芦屋森の会2001が誕生した瞬間でした。

現在の取り組みは大きく2つあります。1つ目は、発足当時から続く森のメンテナンス。作業の流れはシンプルで、第1・3日曜日の月2回、朝10時に芦屋ゲート前に集合し、集まった人数を元に作業内容を検討し、道を歩きやすいよう整えたり、倒木で階段を作ったり、土砂崩れが起きないように谷川を整備したりと、クワやシャベルを使ってとにかく体を動かします。お昼には木漏れ日の中で弁当を食べコーヒーを沸かして一服、遅くとも15時半には解散。雨天中止の連絡は、しっかりとルール化されており、メンバーへの連絡は一切ありません。各自が朝7時に放送されるNHKをチェックし、10〜15時の間に傘マークがあればその日の作業は取りやめになるそうです。晴れの日の『行く・行かない』も個人が自由に決めることができます。「正直、今日どうしようかな?と、迷う日もありますよ。でも、森に入ればみんなに会えるから行ってしまっんです。帰る時にはいつも活き活きしてますよ」と話すメンバーの皆さん。森の持つパワーにみんなが引き寄せられているのです。2つ目は、ハイキングに来た人たちへのガイドです。

スマホが当たり前になった現代。どんな情報も簡単に調べることができますが、そこには載っていない多くの真実が森にはあるのではないのでしょうか。簡易に調べた情報だけで私たちは多くのことを『わかったつもり』になっているだけなのかもしれません。あなたも、一度森に入って、自分の目でゆっくりお気に入りの花を探してみませんか。きっとその花は、あなたが本当に大切にしたいことを教えてくれるでしょう。

### START

2001本の記念植樹祭に参加。植えた苗を心配する気持ちから活動を開始。

### NOW

みんなが歩きやすいように月2回、山道を整備。ハイカーへのガイドも。

### VISION

森と人がありのまま。自然を身近に感じながら暮らせるまちにする。



### 声

会員同士で木や花の担当を決め、それにまつわる知識を常に蓄えているそうです。その数はなんと40種類も!「せっかく森に入ってきてくれたんだからもっと楽しんでほしいです。日々勉強を続けています」ただ花の名前が分かるだけではなく、例えばアジサイは、日照時間に応じて夜の長さを図る仕組みがあることや、ドイツ生まれの医師シーボルトが深く愛したことなく、相手の興味に合わせて話が出るように学んでいるそうです。また、活動を続けるコツは、周囲の人たちと対話し、関係性を作ることだそうです。地域の森林ボランティアと土地所有者とのトラブルを他で聞くことがあります。芦屋森の会2001では村上さんを先頭に、顔を合わせて話をすることで気持ちの良い関係をつくっています。準備すべき関連法則も常に守って活動しているそうです。さらに、メンバーの誰も思いもよらないことが起きました。整備した山径(作業道)の一部が市販のハイク地図やガイドブックに記載されていたのです。「注目されているからこそ、いつも通りの整備を行うんです。森に入ってきた人たちが楽しめるように、1つ1つの作業をやり切ることを大切にしています」

今後は、芦屋の森を気軽に行ける癒しの場所にしたという。「芦屋の奥にこんな場所があって、こんな楽しみ方があるんだと知ってほしいです。森の中は携帯が通じない場所もあるし、不便だと感じることもある。でも、日常から1歩離れて、大人でも子どもでも、森に入るだけで季節を感じたり楽しむことができます。そんな感性をここで磨いてほしいと思います。そのために、これからも森の整備と自然に関する知識の吸収は欠かせません」

私たちが解決したい課題

季節の楽しみ方を忘れてしまった  
今の人たちの生活



芦屋森の会 2001  
(2001年設立)  
村上 敏彦

東北大学卒業後、株式会社東芝に勤務。山歩きを契機として同好会「芦屋山水会」を創設、1/25000 地図で自分のコースを決めて山行し、六甲山系の尾根・谷筋の殆どを踏破してきた。山行中に目にする花・木の様子から森林生態学に興味を持ち種々の資格を得た。森林草原の実務活動に努め、自然公園指導員なども務める。



4  
~  
10

最後には「勝つ」と思いながら  
活動を続ける。



3  
~  
10

「サービス」を提供するのではなく、  
「コミュニティ」を提供しなくてはいけない。

# 03

## 芦屋というリズムにみんなでのる。ジャズからはじまるまちづくり。

あ

ちこちから聞こえる楽器の生演奏、パワフルな歌声。人々は立ち止まり、音楽が終わるとちょっと笑顔になってまた歩きはじめる。2017年4月29日、ジャズシンガー高橋リエさんとクリス・チアリさんが主催した芦屋ジャズフェスティバルに、のべ1万人以上の人たちが参加し、ジャズを楽しみました。

元々は会社勤めをしていたという高橋さん。仕事に疲れたある日、立ち寄ったジャズバーで聞いた生の歌声に感銘を受け、幼い頃から抱いていた歌手になりたいという気持ちを思い出したそう。遅咲きながらも、ジャズシンガーとしての人生が始まったとのこと。

その頃に芦屋に住み始めた高橋さんは、なんだか芦屋は、閑静な住宅ともいえるかもしれないが、賑わいがないなと思っていたそう。同じ考えを持つクリスさんと友人たちと話していると1日にして、どんどんアイデアが膨らみ、みんなで意見を出し合ったことで、芦屋のまち全体を使った大規模ジャズフェスティバルを始めてみようとなったそう。4月30日は国際ジャズ・デー。前日で祝日の29日に開催することに。決まったからには、実現するのみ。高橋さんたちは、全力で走り始めました。

まち全体で開催するため、会場となる普段は普通のお店を借りるために交渉したり、パンフレットやポスターを用意したり。ジャズの持つ古臭いというイメージを払拭するべく、若者にも人気があるアーティストへ出演依頼をしたりと、とにかく準備は、大変だったそう。さらに、芦屋の人たちにジャズを知って欲しかったし、子どもたちにも気軽にジャズに触れて欲しかったので入場料を無料に。とにかく、たくさんの人にジャズを楽しんでもらいたい気持ちだったそうです。

から、有名無名に関わらず、自分達がかっこいい、聞いて欲しいと思うアーティストに出演してもらってるんです」

芦屋ジャズフェスティバルは、単なる1日のお祭りではなく、音楽というみんなが楽しめるコンテンツを使った誰もが参加でき、関わった人たちは、まちで出会えば立ち話をしてしまう。そんな大きな新しいコミュニティなのかもしれません。

ぜひあなたも、4月29日の芦屋ジャズフェスティバルに参加して、市民みんなで演奏する芦屋というリズムにのってみませんか。

### START

ジャズ仲間と、思いつきから  
まち全体を会場とする  
『芦屋ジャズフェスティバル』を開催。

### NOW

コロナに負けず、  
オンラインなどの工夫をして  
発信し続ける。

### VISION

芦屋を音楽が溢れるまちにして、  
子どもの将来や大人の悩みを  
解決するように。

私たちが  
解決したい  
課題

「閑静」を守るため  
逆に失われている  
文化芸術に触れる機会



芦屋ジャズフェスティバル  
実行委員会 (2016年設立)  
高橋 リエ

一般企業の営業職を経て、2007年にジャズボーカリストとしてデビュー。日本中を飛び回り、イベント出演やソロコンサートなどに出演する人気ジャズシンガー。ボーカリストとしての活動の他、ジャズ入門者からプロを指導するボーカルレッスンや、ジャズのビートに英会話を乗せてナチュラルなイントネーションや発音を学べる英会話レッスンも行う。



迎えた当日。JR芦屋駅前のホテル竹園では開園前から行列ができてきました。「ホテル前にたくさんの方が来ていますよ、とスタッフさんが教えてくださって。すごく嬉しかったことをよく覚えていますが」と振り返る高橋さん。

大成功に終わった1回目。2回目は協賛も出演者も増加し、高校生など若い世代も参加するイベントへ。3回目にはユネスコのインターナショナルジャズデーのオフィシャルページにも紹介され、代表から感謝状も届いたそう。「ジャズの世界的な団体から認められ、本当に光栄です。出演希望のアーティストも増え、何より楽しみにしてくれる芦屋の方も多くなり、成功させなきゃ、とより使命感を持って取り組むようになりました」と語る高橋さん。

順調に回を重ねていきましたが、2019年、新型コロナウイルスの蔓延により芦屋ジャズフェスティバルも延期に追い込まれました。しかし、ただ延期するのではなく、高橋さんたちは万全の感染対策をした上で無観客配信を決定。「こんな時にライブ配信なんて、という方もいましたが、今自分に来ることをしたくて、みんなで考え抜いてライブ配信にたどり着きました。そして、まだまだ続くコロナの影響で2021年のジャズフェスティバルもライブ配信になりましたが、コロナが収まっていた2021年6月にルナ小ホールでライブを行うことができました！」約2年ぶりに、生の音楽を届けることができたと嬉しそうに話す高橋さん。「楽器の生の音って、人にすぐエネルギーを与えてくれますし、心に何かを残してくれるんです。演奏を聞いて、私みたいに歌手に憧れる子どもが出てくるかもしれない。だから、有名無名に関わらず、自分達がかっこいい、聞いて欲しいと思うアーティストに出演してもらってるんです」



6  
10

みんなが活躍できる機会をつくれば  
「コミュニティ」が出来上がっていく。



5  
10

イベントは、運営側の方が楽しい！



# 04

## こんな路地裏のマンションに!? 古本屋コミュニティが生む人間関係。

**壁** いっぱいの古本、畳と座布団、少し年季の入った台所。日本の家ではあまり見かけない暖炉文庫があります。「打出にある図書館のボランティアに参加して、読むだけだった本が、提供するものに変わったんです」と当時を思い出して嬉しそうに話す長谷川さん。地域の人たちと世間話をしたり、常連さんにおススメ本を紹介したり、本を通じたコミュニケーションに楽しさを見出したそうです。そこからもっとたくさんの人に本を提供したいと、「箱古本市（フリーマーケットのように、古本を売るイベント）で古本を販売し始めたそうです。」

すると一つの店舗でいろんな人が間借り形式で古本の販売を行う大阪の『みつばち古書部』に誘われ参加することになり、不定期&間借りでの古本屋事業がスタートしました。それからしばらくしたある日、知り合いから「古本屋にめっちゃ良い物件あるから、やってみないか？」と声をかけていただいた事が本格的な事業のはじまりとなりました。

物件探しの他にも、多くの人との出会いなど偶然の連続から風文庫は始まったそうです。長谷川さんは「お店を開くほどいっぱいの本は持ってないし、こんな広いスペースで古本屋はようせえへんと思っただけです。でも、周りの人と話をしていると、段々その気になってきちゃって」と当時を振り返ります。様々な人に相談しながらオープンにこぎつけたそうです。

今の風文庫はいくつかの取り組みから成り立っています。

- ① 絵本・古本の買い取りと販売
- ② 和室部分をイベントスペースとして使用
- ③ 暖炉周りをギャラリーとしてレンタル
- ④ フェアトレード雑貨の販売

になると本から離れる人が多いですよね。スマホの普及で紙の本に触れる機会が減った今だからこそ、装丁にこだわっている本を新刊で仕入れてくれるんです。紙の持つ良さを知ってほしいんですよ。それから、風文庫にいくと誰かと本の話ができる、そんな場所として守っていききたいですね」と本への愛情とコミュニケーションの大切さを語る長谷川さん。

風文庫はただ古本を売っているのではなく、本との付き合い方を見直すことでわかる人生の過ごし方を教えてくれるのかもしれない。

あなたも、久しぶりにスマホの電源を切って、本と一緒にゆっくりとした休日を過ごしてみませんか？

⑤ 芦屋みつばち古書部の運用  
特に大阪の『みつばち古書部』と同じシステムを正式に導入した⑤は、46個の棚があり空き待ちの人が多いんだとか！

さらに、2020年春より古本のオンライン販売も開始しました。開設の決め手はコロナにより全国的に本屋が閉鎖したことでした。「図書館のボランティアをしていた時、毎週土曜日に20冊も借りていく小学生たちをたくさん見ていたんです。本屋が閉まっている中、あの子たちはどうしてるんだろう？と考えると居ても立ってもいられなくなって、オンライン販売を始めました」そういつたきっかけて始めたことでしたが「前からこの本を探していたんです」という人が現れたり、常連の方から「この本あるなら取りにいから置いていてくださいー」と連絡がきたり。長谷川さんは顔を突き合わせて会話を交わしながら本を手渡したいと思っていたので対面販売にこだわっていたのですが、オンライン販売でも、本を介せば人と繋がるのだと気付いたそうです。

また、これからもお店を続けていくモチベーションも、やはり人でした。例えば、古本を目当てに来店した人がギャラリーで展示しているイラストレーターに仕事を頼んだり、芦屋みつばち古書部の部員同士が実はご近所さんだと分かって仲良くなったたり。「人と人が繋がった瞬間に、この店をやってよかったーと、しんどかった事すべてが吹っ飛ばんです」と満面の笑みで話す長谷川さん。1つのお店でいくつもの顔を持つ風文庫ならではの出来事でした。



これからの目標は、風文庫を1日でも長く続けること。「子どもはほっておいても本を読むけど、大人



### START

図書館ボランティアに参加。  
本を提供する楽しさを知り、  
古本販売を小さく開始。



### NOW

テナントを借りて本格販売開始。  
46人の本好きがお店に  
部員として集まる。



### VISION

街々にある小さな本屋が、  
人と繋がれる  
きっかけの場所に。

私たちが  
解決したい  
課題

本を読む時間が  
なくなった  
今の大人たち



風文庫  
(2019年設立)  
長谷川 貴子

小4の時に父親の転勤にともない芦屋へ。市内の中学・高校を卒業。結婚相手も芦屋の人で、ほぼ半世紀にわたり芦屋に住み続けている。子どもの入学式で初めて聞くはずの校歌をそらで歌えたり、参観日に自分の同級生に出会ったりなどの「芦屋あるある」を多々経験しながら、狭い街ならではのよいところも、困ったところも見つけて今日に至る。



「社会の気分」を言語化することが大事。

昔のことばかり話す団体に人は集まらない。  
その過去は、共有できないから。



# 05

## まちの中での役割を見つけると、人生は『おもしろく』なる。

**声** 芦市に生まれ、育ち、今は2人の子どもを子育て中の廣狩さん。webクリエイターとして市内に事務所を構え、1日中芦屋で過ごすことも多いそうです。「フリーペーパー『あしやらへん』創刊のきっかけは、ずっと芦屋に居るのに、あまり芦屋のことを知らないと感じたことなんです。芦屋情報は何を見ればどこに行けばあるのか分からなくて。市外の友人に『芦屋のお店に連れてって』と言われた時、困ってしまっただけでこれをなんとかしたいと思ったんです」と語る廣狩さん。

また芦屋市に住んでいるだけで「金持ちだね」と言われることが多くてそこにも違和感をもったそう。実際は下町っぽいところもあれば、親しみやすい商店街なんかの『おもしろい』ところもたくさんあるのに。

今ないなら、つくれば良いと考え、芦屋の裏の魅力を知らうための超地域密着地元発掘メディア『あしやらへん』が誕生しました。紹介するのは、気になるお店とそこで働く店員さんを中心に、人々場所、モノなどです。ただのグルメ情報ではなく『こんなおもしろい人がいるんですよ。おもしろい店やから行ってみたい』と紹介しています。「近所に気になると中々行けないお店ってあるじゃないですか。そういうお店を掘り起こしていきたいんですよ」と説明してくれる廣狩さん。あしやらへん第1号を見た人が来店してくれ『来てくれたらいいなと思ってた雰囲気のお客様だったから嬉しい』というお店からの連絡もあったそう。

『あしやらへん』は、広告掲載料以外は無料としていっているフリーペーパー。「本業のweb制作がありますので、『あしやらへん』を通してまちや人と良い関係を築ければ良いと考えているんですよ。あと、まちを自転車で行く時に、取材したお店からぜひあなたも、フリーペーパー『あしやらへん』を片手に芦屋の表も裏も散策してみませんか。まだまだ芦屋には行ってなかった『おもしろい』がたくさんあるんです。そしてそこで会うおもしろい店主たちと話すことができたなら、きっとあなたの人生や考え方も『おもしろく』なるでしょう。

ら声を掛けてもらえたらなんか嬉しいですね」と、本業とは分けて考えているそう。

2021年11月に創刊したばかりの『あしやらへん』1万部をポスティングし、残りはカフェなどに置かせてもらっているそう。「これからも継続していきたいと思っています。おもしろいお店の魅力を伝えたいんです。芦屋って、個人事業のカフェやレストランもたくさんある気がするんですよ。その魅力を読者に伝え、お店に行ってもらい、その人が他の地域の人にも伝えるという循環を作りたいんですよ」

廣狩さんは、自転車で取材に伺うことが多いそうで「芦屋市って自転車で周れるし、知り合いに遭遇することも多いコンパクトなまちなんです」と話してくれ、第1号発刊からわずか3か月の2022年2月には、第2号も。

「あしやらへんが20〜30号まで続くと、読者も芦屋を深く知るようになり、エリアごとの魅力的な色がたくさんと浮かび上がってくるはず。そうやって読者ひとりひとりが最良のエリアを持ち、まちを楽しめたらいいですね。それから、あしやらへん以外にもいるいる人が芦屋でフリーペーパーを作ってくれたら面白くなると思いますよ。芦屋の魅力が多角的に語られて」そう話す廣狩さんは、最終的にあしやらへんを通じて人を集めて、一緒にワークショップなどが行える『場』を作りたいと考えているそう。

アイデンティティをしっかりともち、まちの中で自分が果たすべき役割を見つけている廣狩さん。もし、廣狩さんのような人があふれる芦屋になったなら、住む人みんなが自分のまちを誇りに思うことができるのではないのでしょうか。



私たちが解決したい課題

既にあるのに循環できてないまちの情報



あしやらへん編集部 (2021年設立) 廣狩 拓也



フリーランスのWEBクリエイター。地域に根差したクリエイターとして、芦屋・神戸の事業主をメインクライアントとして事業を展開。クライアントの想いをしっかりと汲み取ったホームページを作り上げている。2021年には芦屋市の地元発掘メディア「あしやらへん」のフリーペーパーとWEBサイトをスタートさせた。



10  
10

「ほころび」を作ること、  
人が集まってくる。



9  
10

自身が疲れないことが大切。

# 06

## 芦屋から地球を考える！ 一隅の光となる歌声を届けたい。

### 私

の好きなこの街復興支援プロジェクトが初めて公演を行ったのは、2011年11月のこと。3月に東日本大震災が起こり、リーダーの檀さんと、ディレクターの村嶋さんは7月に津波から生き残った一本松の街・陸前高田市へ先遣隊として車を走らせたそう。「現地のことを色々調べる一方、私たちに何が出来るか考えました。思い出すのは、やはり阪神・淡路大震災当時のことでした」と語る村嶋さん。関西近辺の音楽仲間を募って「一緒に陸前高田に行き、生きる力と勇気の歌声を音楽で届けませんか」と声をかけると、なんと34名のメンバーが手を挙げてくれました。「避難所でコンサートをしたのですが、みんな泣いて聞いてくださった」さらに観客席から「私も歌いたい」と津波で両親を亡くした少女が出てきてくれ、それがきっかけで、同じ境遇の少女5人と知り合ったそうです。その2011年から2016年までに23回も訪問し、公演をボランティアで9回も実施しました。さらに3度、子どもたちを芦屋に招待し、原発事故から逃れた家族の支援も行いました。熊本地震の南阿蘇、豪雨災害被災地の福岡県朝倉市などでもコンサートを行い、チャリティーCDや公演会場でのカンパを集めた皆さんの支援も行ってきました。

現在は子どもを含む合唱団員数十名で活動を行っているそう。コロナ禍でソーシャルディスタンスを注意しなくてはいけない今、どのように練習を続けてきたのでしょうか。

「コロナが蔓延し始めたこの2年も自分達の文化を守りながら、活動は絶対に続けてきました。もちろん専用ホールでの感染対策は万全に行い、練習をする機会を設けているんです。個人音楽練習を強化したり、一部オンラインレッスンも取り入れてなんとか継続してらるんですよ」ルナ・ホール等で行った5回

あなたの好きなこの街復興支援プロジェクトが、これまで多くの活動をこなしてこれたのは、被災地から逆にパワーをもらっているからかもしれません。そこにある人間同士の真のやさしさ、温かさにもふれることができるからです。支援をする側、される側という分け方では考えられないのです。

### START

東日本大震災の被災地で  
心を癒すために、  
合唱ミュージカルで支援。  
被災者を芦屋に呼ぶことも。



### NOW

コロナに負けず、  
新作にも果敢に  
チャレンジし続ける。



### VISION

一緒に向かっている仲間と  
地球規模の課題も  
芸術文化の力で  
立ち向かいたい。



私たちが  
解決したい  
課題

『平和』『環境』問題を  
身近なこととして  
繋がることの大切さ



私の好きなこの街  
復興支援プロジェクト  
(2011年設立)

檀美知生 村嶋由紀子



1989年に合唱団 TERRA を設立。1995年の阪神・淡路大震災で練習場が壊れたことをきっかけに、1997年に TERRA HALL を建設。2011年、東日本大震災の被災地を訪れたことをきっかけに『私の好きなこの街復興支援プロジェクト』として再スタート。国内外の弱い立場の人々の支援を行っている。プロジェクトの中心は「奇跡の街合唱団」。

## 一つのア이가、 ソーシャルビジネスになるまで



STEP.01

**まちを良くする  
アイデアを思いつく。**

まちを散歩してるときなどに、  
課題に気づく。見つける。  
自分の特技や経験が役に立つかもと思う。



STEP.02

**アイデアを少しだけ  
カタチにして発表する。**

みんなが分かりやすい言葉で  
アイデアをまとめてみる。  
ちょっと勇気を出して発表の舞台に立ってみる。



STEP.03

**アイデアについて  
いろんな人と「対話」する。**

発表を聞いた人が、話しかけてきた時  
自分と違う意見や年代の人でも  
想いを伝え合ってみる。真剣に。



STEP.04

**対話から生まれる「問い」で、  
問題の本質に気づく。**

相手を信頼し、深く話せたなら、  
一つの「答え」が見つかる。  
案外それは、身近なコトなのかも。



STEP.05

**行動し始めることで、  
仲間が集まる。**

イベントを企画したり、  
団体を立ち上げたり、  
ヘルプの声をあげたり。とにかくやる。



STEP.06

**社会のニーズに合わせることで、  
「仕事」になる。**

人が、社会が「今」求めていることを  
考えてみる。  
理想の「未来」を描きながら。